

加工トマト品種「KGM125」の摘心栽培による収穫作業負担軽減技術の実証

要約

収穫作業が負担となっている加工トマト栽培において、摘心方法をまだ検討する必要があるが、摘心を行うことで一果重の増加が図れ、収穫作業負担軽減につながることがわかった。また、一挙収穫型の品種を栽培する際は、リスクと労力を分散させるため、作付時期をずらす必要がある。

○ 展示のねらい

加工トマト品種「KGM125」は、同時期に集中して着花し、同熟率が高い一挙収穫型の品種であり、収量も多く、収穫作業機向けの品種として普及が期待されている。しかし、収量は高いものの、着果数が多く小玉になる傾向があり、作業効率の低下が懸念される。そこで、一果重増加を目的として摘心栽培を行い、収穫作業負担の軽減を図る。

○ 主な成果

表 1 摘心区および剪定区の調査結果と対照比

	摘心区		剪定区		対照区
	結果	対象比(%)	結果	対象比(%)	
実収量 (t/10a)	7.8	109%	6.7	92%	7.2
総着果数 (個/株)	146.2	93%	138	87%	158
出荷可能果数 (個/株)	83.2	101%	70.6	86%	82.4
出荷不可能果数(個/株)	63	83%	67.4	89%	75.6
果実収穫率 (%)	57%	109%	51%	98%	52%
一果重平均 (g)	67.9	108%	68.0	108%	63.1
一果重増減による収穫能力	32.4箱/日・人	8%増	32.4箱/日・人	8%増	30箱/日・人(平均)
10a収穫するのに必要な日数	12.0日/7.8t	100%	10.3日/6.7t	86%	12.0日/7.2t

- ① 摘心方法として、新芽と大豆以下サイズの果房を除去（摘心区）と、剪定ばさみを用いて枝先の果房の下を剪定（剪定区）を行った。
- ② 摘心区では、摘心することで一果重が8%増大し、小玉果が減ることで、収穫作業の軽減が図れた。また、収量も1割近く増大した。剪定区では、摘心の効果は一果重の増大による作業負担減だけに留まり、収量には反映されなかった。摘心による病害等の発生はなかった。
- ③ 品種「KGM125」は機械を利用して一挙収穫するため、従来の品種と比べ天候の影響を受けやすい。そのため、定植時期をずらし、リスク分散と収穫期労力分散させる必要がある。

○ 今後の方向性

摘心栽培は、一果重が増加することによる収量増と収穫作業負担軽減につながる技術である。しかし、摘心の方法やタイミングは検討する余地がある。また、機械利用の一挙収穫型の品種を栽培する際は、作付時期をずらしてリスクや労力を分散させることが望ましい。

実施機関： 下都賀農業振興事務所経営普及部 TEL0282-24-1101 実施場所： 下野市
 問合せ先： 栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315